米欧亜回覧

第６０号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集
広報メディア委員会

「大国中国とどう向き合うか」
遠藤滋氏を招いての講演！
十月全体例会は二十四日(日)午後

今、中国の存在がいよいよ大きくなり、「この大国と、どう向きあうか」が極めて重要な問題になってきた。今回は、三井物産の元専務取締役で、現在、香港最大のコングロマリットといわれるハチソンワンポアジャパンの代表取締役ＣＥＯである遠藤滋氏にご講演をいただくことになった。米国駐在十三年、中国駐在十年、その間中国とのビジネスは二十年以上にわたる遠藤氏ならではの「体験的中国論」である。またとない機会なので、会員紹介の知人友人も大歓迎であり、それぞれに声を掛けてほしい。

なお、当日は三部構成で、一部は十三時三十分から会務報告。二部は十四時四十五分から十七時まで講演及び質疑応答。その後三部として講師も出席予定のラウンジでのワイン懇親会が行われる。

7月全体例会（国際文化会館）

七月全体例会は　明治維新の群像―歴史写真からの発見」で盛会！

第五十六回全体例会は七月十七日（日）、十三時三十分から国際文化会館にて約五十名が参加して開催された。

第一部の会務報告に続き、第二部として東京大学大学院情報学環特別研究員の倉持基氏をゲストに「歴史写真でみる明治維新の群像」をテーマとしたトークと映像の会が行われた。倉持氏持参の膨大な歴史写真の中から次々と映し出される多数の画像の紹介と解説、そして、泉氏との軽妙なトークが繰り広げられた。岩倉具視や久米邦武などの本邦初公開の写真もあって、参加者からの質問や発言は予定時間を過ぎても続き、盛会であった。（詳細は二・三頁）

魅力ある講師、部会でも続々招聘！

歴史部会では、ＮＨＫ「龍馬伝」でも話題の岩崎弥太郎に関するお話を、十二月六日（月）、三菱研究所のアナリストである成田誠一氏を招いてうかがうことになった。

「岩崎彌太郎」のご著書もあり、テレビとは異なる岩崎彌太郎の実像と後継者の彌之助・久彌・小彌太の三人についても語られる。それは明治・大正・昭和前期の日本経済史を岩崎四代を通じて鳥瞰することにもなり貴重な機会である。

また、グローバルジャパン研究会では、十一月二十一日（日）、上智大学の鬼頭宏氏を招き、「二十一世紀に生かす文明としての江戸システム」のタイトルで講演、質疑応答・意見交換を行うことになった。このところ本研究会は毎回大学院の院生も少なからず参加しており、新しい展開がみられるので関心のある方は是非参加してほしい。

明治国家草創の舞台裏
改正局の心意気

泉　三郎

明治二年の十二月、当時の大蔵省にこんな話がある。そのころ、大臣に相当する卿は伊達宗城、次官に相当する大輔が大隈重信、次官補にあたる小輔が伊藤博文だった。伊達は五十一才旧宇和島藩主、開明派の大名として新政府に入ったが実務には疎い。実務は結局、三十一才の大隈、二十九才の伊藤が牛耳っていた。そこへ静岡藩からスカウトされて加わったのが三十才の渋澤栄一で租税正という役職だった。そこで渋澤は集中的に政策を創り出す「改正掛」を新設すべきだと建言し、認められその主任となる。新政府の「国家戦略室」という感じである。明治三年、その一員だった前島密が、そのころの「改正局」の雰囲気をこう伝えている。

「大隈、伊藤氏も出席し、伊達侯も亦臨席し、放胆壮語一も尊卑の差は置かず、禁懐を開いて時事を討論せり。余は是に於いて、頗る愉快を感ぜり」

旧幕藩体制という古い建物をぶちこわし、そのあとに明治統一国家という新しい建物をいかに創り上げていくかの時期である。どこから手を付けてよいかわからない状況だった。そこでこれを集中的に議論し決定する組織をつくったのだ。この改正局では二年足らずの間に二百もの改正事業が次々と企画実施された。たとえば、全国の測量、度量衡、租税の改正、駅伝制度の改良、貨幣の制度、禄制の改革、鉄道布設案などなど。担当者は寝食を忘れて仕事に没頭した。まさに明治国家草創の時であり、その担い手はいずれも三十歳前後の青年たちであった。

いま、平成二十年代の日本は、明治維新に匹敵するくらいの大きな世界的な変化の中で、廃藩置県に相当するような大改革を必要としている。岩倉使節団の大久保、木戸、伊藤らは「米欧回覧」をしながら必死に学び、留守政府の大隈、井上馨、渋澤栄一らは命をかけて仕事をした。管内閣も与野党も各省の官僚も、この明治草創期のサムライたちの心意気と燃えるような使命感に是非学んでほしい。

第56回 全体例会

歴史部会担当 倉持基氏をゲストにトークと映像の会 「歴史写真で見る明治維新の群像」

第五十六回全体例会は七月十七日（日）、国際文化会館講堂において開催された。出席者は約五十名。

十三時三十分より始められた第一部全体例会において、まず泉理事長から現況報告をかねた挨拶があり、つづいて各部会報告が行われ、実記を読む会　小野、歴史部会　小野、英文実記を読む会　岩崎、グローバルジャパン研究会&事務局　石垣、の各幹事より活動状況について簡潔な報告があり、また、六月に実施した「中国・歴史と上海万博の旅」について小野氏より概要報告が行われた。

小休憩の後、泉代表の司会・進行によって第二部の講演会が行われた。今回のテーマは「歴史写真でみる明治維新の群像」、東京大学大学院情報学環特別研究員の倉持基氏をゲストにトークと映像の会を実施した。膨大な歴史写真とともに、明治天皇も含む明治維新の主役脇役と当時の写真・写真師の興味深い解説が展開され、あたかもタイムスリップしたような雰囲気の中で泉氏との軽妙なトークが進行し、多くの質問や意見も出て盛会となった。

（文責）石垣禎信

ゲストの倉持基氏

◇倉持氏トーク要旨◇

講師の倉持基氏は、東京大学大学院情報学環の特別研究員として、歴史写真を資料にして、歴史を読み取るという新しい手法を開発・研究しておられる。共著で、『英傑たちの肖像写真』がある。

歴史写真とは、主として幕末・明治維新期の志士や元勲たちの肖像写真である。それを歴史情報を有し、歴史資料的な価値を持つ写真と定義して、それらの古写真を精力的に蒐集し、そのデジタル化、アーカイブ化を進めながら、一方でその歴史的古写真を解読して、今までの文献では空白であった歴史的背景・真実に迫る研究である。最近もアメリカのラトガース大学で大量な歴史写真が発見され、入手してきた膨大な写真のいくつかを映写していただいた。今後の進展が楽しみな分野と言えよう。

日本に写真が渡来したのは、一八四八年で最初は銀板写真だった。撮影に一～三分を要した。十年後の安政年間に湿版写真が導入され、撮影時間は五～十秒となった。幕末維新の志士たちの写真は、ほとんどがこの湿板写真であり、その間は、瞬きも、身動きも出来なかった。従って、写場には、首を動かさないための、首掛けもあった。明治中期に乾板写真になってやっと、一秒以下になった。

日本人の撮影による銀板写真は島津斉彬像一枚のみ残っている。大鳥圭介か斉彬が篤姫を記念に写したという話があるがその写真は残されていない。

著名な湿板写真の専門の写場（写真館）に、長崎の上野彦馬の写場がある。フルベッキ写真や、坂本龍馬、高杉晋作、中岡慎太郎、伊藤俊介、桂小五郎などの若き姿が残っている。写場の背景の窓や棚、カーペット、ポーズの変遷や装束などの情報、写真の裏書、その台紙のデザインや口伝などから、写真の撮られた具体的時代が特定できる。

岩倉具視と小姓
（岩倉具忠氏所蔵）

彦馬は、長崎で上野幸馬や内田九一を育てた。後に、幸馬は神戸で、内田は東京や横浜で写場を構えて活躍する。

西の上野彦馬に対し、東の下岡蓮杖ともいわれた蓮杖は、横浜の野毛で写場を開いて同様に活躍した。明治初期までの写真は、外人の写真家以外は、ほとんどこれらの写真家とその弟子たちによって撮られている。

有名なフルベッキ写真は、フルベッキが教え子との記念に何枚か撮ったのが残っている。そのうちの一枚は、岩倉具視の息子・具定と具経の二人を中心に、佐賀藩致遠館の学生と撮ったもので、この写真の後方にいる太った人物を西郷隆盛とする説があるが、隆盛ではない。西郷の写真と言われるものは、いずれも年代や西郷の行動範囲と撮影場所がそぐわなく、西郷ではない。写真嫌いの西郷隆盛の写真は、現在までのところ一枚も発見されていない。幽霊と西郷の写真はない。

この岩倉具視の息子ふたりは、後にフルベッキの斡旋で、米国のラトガース大学に留学してグリフィスに学ぶ。米欧回覧の途次に、岩倉具視はシカゴでこの息子たちに面会した際に、二人から断髪・洋装を薦められ、ついに岩倉も洋装化する。天皇の信任状を貰いに、一時帰国した大久保利通と伊藤博文は、岩倉の洋装写真を持参し、これを見て、公家たちの断髪が進んだと言われる。岩倉は大久保らに、各国元首に配るための天皇の肖像写真を撮るよう依頼する。この時、選ばれた写真師が内田九一であり、写真を撮る時に明治天皇の頭を直すために触ったので、最初に現人神の身体に触れた人との伝説が残る。九一は明治天皇と昭憲皇太后の写真を撮影するが、天皇は衣冠束帯姿と直衣姿の、和装写真二種類しかとらせない。大久保・伊藤は洋

ニューブランズウィック留学生集合写真
（ラトガース大学所蔵）

装姿が欲しかったが、再渡米までに間に合わなかった。のちにイギリス滞在中に、やっと撮られた天皇の洋装・燕尾服姿の写真が届けられた。岩倉使節団が帰国後、再び、内田九一が呼ばれて、洋装軍服姿の写真が撮られて、天皇の御真影写真として一般に流布した。御真影は、天皇のイメージを明治期の国民に浸透させるために絶大なる影響力を発揮した。その後も、明治憲法が発布されるに際し、再び御真影が求められたが、写真嫌いな天皇が認めず、やむを得ず、イタリア人画家・キヨッソーネが肖像画を描き、それを写真に撮らせたものに落ち着いた。キヨッソーネは自ら大礼服を着て自分の姿を写真に撮り、それを天皇の顔姿に変えて描いたことは、大礼服を着たキヨッソーネの肖像写真が残されていることからも確認される。

大久保利通は、写真が好きだったようで回覧の最中に、各地で写真をとっている。サンフランシスコに着くまでに洋装姿となった大久保は、回覧旅行の間に一度も髭を剃っていない。従って、大久保の写真は髭の長さを見れば、撮影の順番が判明するという話もなかなか面白い。

ほかにも、いくつかの歴史写真をめぐる考察が披露され、歴史研究の新分野の進展が垣間見られた。

（文責）小野　博正

事務局運営、山田氏から石垣氏に継承

四月総会で、事務局長の山田哲司氏が勇退し、新たに石垣禎信氏が就任した。課題の引継ぎも、既に七月例会や新企画など滞りなく継承されている。まだ馴染みが薄い会員も多いと思われる石垣氏の紹介と、長年会の為に尽力されてきた山田氏の謝恩懇親会の様子を報告する。

ニュース六十号を顧みて「JIKKI SALON」の頃（泉三郎記）

本会の機関紙、米欧亜回覧ニュースは本号で六十号を迎えた。満十年経ったことになるが、実際は会の設立前からニュースは発刊されていて、当初は「JIKKI SALON」と称していた。

そのころは「スライド上映会」が主たる行事で、第一号の書き出しは、次の通りである。

『映像で見る「岩倉使節団の世界一周旅行」の試写会が、九月二日午前十時半から東京港区鳥居坂の国際文化会館レクチャホールで、多数のゲストも含め各界にわたる約百名が参集して催された』

このころのスライド上映会は、三十分ものを九巻、一日で全巻見る企画で、ランチタイムを挟んで、まる六時間の長丁場で、「弁当付き三本立ての上映会」などともいわれた。又、上映のあとスピーチの時間が設けられ、参会者の中から発言者は後を絶たず、制限時間をオーバーして興味ある感想が述べられた。「JIKKI SALON」の一号には、多くの人のスピーチが記事として掲載されている。

スライド上映会の次に企画されたのが、「岩倉使節の足跡を辿る旅」シリーズで、第一回は日通旅行社催行で「米国周遊十一日間の旅」（四十三万八千円）だった、「実記を読む会」が始まるのは次の段階からである。

当初の幹事役は浅沼晴男氏、田川信人氏、足立光正氏、小田八郎氏たちだったが、田川氏も小田氏も今は幽冥世界を異にしている。しかし、浅沼氏、足立氏がなお健在なのは、まことにこころ強い。

事務局長
石垣禎信氏

新事務局長・石垣禎信氏に期待する

石垣氏は国際派のビジネスマン・経営者です。日本IBMの事業部長時代、ゴーン社長とわたりあったことは有名で、その後、世界最大のデータセンター（株）アット東京の社長・会長を歴任、現在はIT関連会社の役員も兼ね、戦略コンサルタントとして日本橋に事務所をお持ちです。

趣味は、ゴルフ、テニス、クルーザーと幅広く、クルマ大好き人間で、泉理事長の一橋大（自動車部）の後輩でもあります。日本舞踊の名取の美しい奥様の関係もあって邦楽や歌舞伎にも造詣が深く、奈良出身で「意外と日本的」なのだそうです。

ビジネスマン風で怖い人かと思ったのですが、事務局をお手伝いしていると、実はこころ優しく、色々気遣って下さり、誠に有り難い方だと思います。懸案であった会の若返りや活性化にも前向きで、戦略的理事・事務局長としてご尽力くださるのではないかと思います。

（小松優香）

前事務局長の
山田哲司氏

山田哲司氏の謝恩懇親会、会場は溢れんばかり

七月十七日、全体例会の終了後、麻布の「楓林」で謝恩懇親会が行われ、三十数名が集まって会場は溢れんばかりだった。参加した会員有志全員の山田氏に対する心からの謝意に満ちた会であった。

会は小野博正氏の巧みな司会ぶりで和気藹々のうちに進み、理事の藤原氏、矍鑠たる倉本氏、幹事として長年裏方の苦労を知る多田さんから、それぞれの思いを込めた話があり、また、永島氏から中国旅行の隠れたエピソードも披露された。

最後に泉理事長から当会設立以来の話も含めた挨拶があり、小松さんから花束、多田さんから会からの記念品が贈られた。

岩倉使節団に通じる使命と情熱を秘めた品格と教養溢れる国際派の紳士であり、引退を惜しむ声が多かった。終わりに山田氏からも思い出もまじえての挨拶があり、賑やかに楽しく、そして爽やかな宴となった。

（中山進）

海外歴史ツアー・六月十七日～二十四日
会員十四名が 中国・歴史と上海万博の旅」

久しぶりの当会の外国歴史ツアーは、会員十四名（男性十名、女性四名）の参加を得て、大変に楽しく有意義で知的な旅となった。この旅行は、会員の塚本弘氏が、上海万博の日本代表として派遣され、岩倉使節団が帰途上海に寄港しているので、その足跡を辿ることもあって企画された。そして、万博だけでなく、中国の近代の歴史を考える機会にしようと、一般的にはなじみの薄い中国東北部を選んだのが結果的にはよかったと思う。

《旅行行程》は七泊八日で、次の通り。

第一日目（成田―大連）、第二日目（大連―旅順―大連、第三日目（大連―瀋陽）、第四日目（瀋陽）、第五日目（瀋陽―上海）、第六日目（上海万博）、第七日目（自由行動、十一名は杭州旅行）、第八日目（上海―成田）。

参加者の今回の旅行の感想をまとめた『中国旅行記念文集』を作成した。その皆さんの印象を要約すると、おおよそ次の通り。

○ダイナミックに経済発展をする中国の躍動を、上海万博や上海浦東の摩天楼ビル街、そして瀋陽や杭州の内陸部に林立する高層ビルや新興住宅街の建設、内陸まで延びる高速道路網に見られ、予想外に清潔な都市の街路は我々の古い中国のイメージを突き崩した。日本が、四、五十年前に経験した高度経済成長を、今、中国は驀進している感じである。

○中国近代の歴史を考えさせられた。今回、旅行社が八日間スルーの歴史通のガイドを用意してくれた。彼は、若し質問して分らないことがあれば夜中に勉強して、翌日には丁寧に説明してくれる真面目さで、中国臭のない、おおむね公平な歴史観の持ち主であった。

最初の大連は、戦前の日本が力を入れた満洲への入り口であり、満鉄本社が置かれ、満洲経営の拠点であった。今に、旧ヤマトホテルや幾つかの日本人が建てた建築物が残されていて、満洲時代の面影を随所に探せる。新幹線の魁でもあった「アジア号」が走った鉄道に我々も乗った。旅順では日露戦争の激戦地、二百三高地や乃木将軍とステッセル将軍の水師営会見所を見た。思えば旅順は、関東軍の司令部も置かれ、大連・旅順が辿った百年は、アヘン戦争以来、欧州、ロシア、日本に中国が翻弄された歴史そのものであった。

次に行った東北部の瀋陽（旧奉天）は、江戸時代の初期に、清朝の太祖・愛新覚羅・ヌルハチと二代目ホンタイジとが清朝を起したところで、瀋陽故宮や北陵にその面影を残す。三代目から、清朝は北京に移る。一方、清朝のラスト・エンペラーの愛新覚羅溥儀が日本の傀儡となって満洲国を建国した頃の中国東北部は、張氏軍閥が支配していた。張作霖・張学良親子である。皇帝を夢見た、張氏の師府がその夢のあとを語る。その張作霖と始めは組んでいた関東軍は、やがて彼が邪魔になり、爆殺する。その鉄道現場も見た。ここまで見た観光客は初めてだろう。さらに、日本は、昭和六年九月十八日柳条湖にて、板垣征四郎や石原莞爾らによる鉄道爆破から、満州事変を起し、本格的中国介入に突入する。現在、そこは九・一八事変博物館として、中国にとって屈辱の歴史、反日の聖堂となっている。一夕、我々は瀋陽賓館（旧ヤマトホテル）で豪華な夕食をとった。

上海も、アヘン戦争の締結の南京条約で、英仏、そして後に日米にも開港させられたのが歴史の始まりである。杭州は森と湖の美しい古都である。蘇軾（蘇東波）、白楽天（白居易）らが、千年以上前に、役人として赴任した時に改修に力を注いだ、傾国の美女・西施ゆかりの西湖に船を浮かべて遊ぶ。

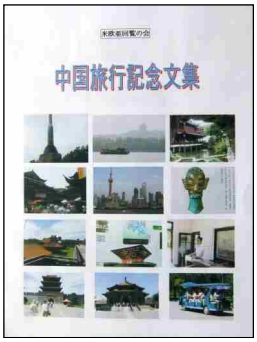
○万博は、塚本氏のご配慮で、日本館、中国館、ドイツ館が効率的に入館できてとても有難かった。そして、その夜、塚本氏夫妻と会食し、いろいろ貴重な話を聞くことが出来たのも本会のツアーならではの特典であった。今回の万博テーマは、『より良い都市、より良い生活』（和諧都市）であった。自然と調和した、幸福度の高い生活である。物の豊かさを競う時代は去ったのかもしれない。

奇しくも日本産業館が置かれた場所は、岩倉使節団が訪れた、江南造船場の跡地であった。

○今回、三つの博物館を訪れた。旅順、遼寧省、上海各博物館である。文化大革命があったにも拘らず、中国の博物館は、その長い歴史的御物をよく整理して保存している。陶磁器、貨幣、青銅器、金銀工芸品、絵画、書、仏像、奇石・輝石・貴石、三彩彫刻など多彩な、豊富な収蔵品に堪能した。

○今回の旅行中の楽しみの一つは、三度三度の食事だった。上海の一晩の和食以外はすべて中華料理であったが、それぞれに地方色があって、質量共にたっぷりで、裏切られなかった。旅行中毎日、ミネラルウオーターを二本ずつ用意したこともあってか、全員、胃腸を痛めることもなく無事旅を終えられたのは何よりであった。

（文責）小野　博正



記念文集表紙

グローバルジャパン研究会」
六月から新趣向で始動、熱気こもる！

グローバルジャパン研究会は、この六月から新しい趣向でスタートした。それは五年前の当会設立十周年記念国際シンポジウム「世界の中の日本の役割」の流れに沿うもので、「日本は、今、世界へ何を発信すべきか」について、各界のオピニオンリーダーによる日本からの提言的講演とフリーディスカッションを行うものである。そして、講師の大学や関連の方にも参加を呼びかけ、若い世代にも参加してもらおうという狙いがある。

（泉　三郎）

激動する世界と日本文化」

第一回は六月三日（木）、国際文化会館にて、講師にユネスコ事務局長官房特別参与、麗澤大学比較文明文化研究センター客員教授の服部英二氏をお招きし、「激動する世界と日本文化」のテーマで行われた。参加者には会員以外も講師の関係する大学院生や一般の方も多数参加され七十二名の盛会となった。

服部英二氏

服部氏は、担当されたユネスコのビッグプロジェクト「シルクロード・対話の道」の総合調査の紹介があり、いまや世界的に認知された「文明間の対話」の提言者として、極めて視野の広い、かつ数千年の歴史を踏まえたお話で感銘を与えた。

その要旨は、まず、現代の地球環境の破壊と文明の危機を考察するには、全人的・文明史的視点が重要性であるとする。そして、これら二つの問題の根は同じであり、旧約聖書のエデンの園にある「生命の樹」にヒントがあると指摘された。本来、エデンの園には「知恵の樹」と「生命の樹」があったのに、その後、「生命の樹」を蔑ろにしていることから今日の危機は起きているという。

氏は、人類の未来は「多様性こそが人類の世界遺産」という哲学の樹立にかかっているという。それは理性、感性、霊性のバランスの尊重であり、科学革命で失われた全人的人間像の恢復である。自然界に生物の多様性が不可欠なのと同様、人間の生存には文化の多様性が不可欠である。そのためには「力の文明から生命の文明へ―モノからこころへ」転換していく必要があり、これこそ日本から世界に発信すべきものであると強く主張された。

そして最後に印象的な言葉を二つ挙げられた。一つは一九二二年に訪日したアインシュタインの言葉、「私の願いは、日本人が、西欧の先を行く、自らの偉大な価値観をそのまま保持し続けてほしいということだ。その価値観とは、①美的感覚に恵まれた生活の仕方、②必要とするものの簡素さとつましさ、③心のやすらかさ、である」。

もう一つは、一九六七年に伊勢神宮を訪れたアーノルド・トインビーの感慨、「この聖なる地に立つ時、すべての宗教の底に横たわる一なるものを感じる」である。

そして、地球と人類を救うための日本の貢献は経済力ではなく、「文化力」であり、精神の砂漠化を食い止め、新しい感動を呼び起こす「人間力」であると結ばれた。

（文責）小松　優香

『日本文化の精髄　『比較法』からの発信」

第二回は九月十八日（土）国際文化会館で、講師に早稲田大学の教授で法学部長の上村達男氏をお招きし、「日本文化の精髄『比較法』からの発信～グローバルな金融危機にもの申す～」のテーマで行われた。

上村達男氏

上村氏は会社法、証券法などの専門家であるが、この七年間、GCOEの大プロジェクト「企業法制と法創造」を企画し、そのセンター長として内外の研究者を糾合し大きな成果を上げて注目を浴びている。しかも、そうした法律学者に似合わず、ジャーナリスト的なセンスをお持ちで、時局の問題についても一般の人にも解るように話すことができる希有な存在である。

その論旨は、日本の近代は欧米の法律を比較研究してきた歴史であり、いまや日本は「比較法」という点で世界の最前線にあり、それが日本文化の精髄に通底しているという認識にある。たとえば、アメリカの会社法や証券取引法は、いわば州単位のローカルな法律に依拠しており、とてもグローバルな規範になるような性質のものでないという。概して、米欧諸国は、自国の法を普遍的なものとする傾向が強く、他国の法を学ぶという習性がない、法はその国の風土的、歴史的、思想的制約によって成立しているという認識に欠ける。その点、日本は、各国の法律を公平に比較研究しており、いまや法学を学ぶには世界で最も適した国になっている、という。そうした前提から日本人は自信をもって、世界に対し法律的にも堂々と発信をしていくべきだという主張である。とりわけリーマンショックに端的に現れた強欲資本主義に対しては、強力な法的規制を行うべきであり、その具体案を日本から発信していくべきだとの議論で、参会者に感銘を与えた。

また、日本はすでに成熟市民社会の段階にあり、それに適合する法律を創造していく立場にあると指摘、これからの日本は、法の「模倣」ではなく、法の「創造」に挑戦すべきだとされた。実に勇気あるこころ強い発言で、参会者の拍手を浴びた。

参加者は四十五名、金融関係や弁護士の方や早稲田の大学院からも多くの参加者があり、質疑応答も盛んに行われて熱気のこもった研究会になった。

（文責）石垣　禎信

実記を読む会報告

連絡　桑名 正行
Tel&Fax 03-3642-9570
mkuwana@nifty.com

■第百四十一回

六月十日開催、出席者十名。第九十七巻　錫蘭島ノ記。

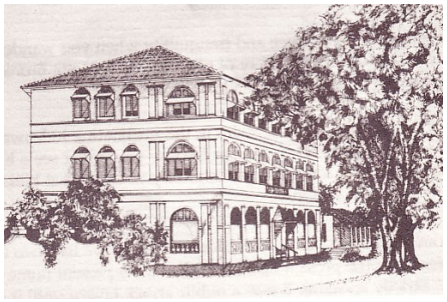
岩倉使節団がスエズ運河を通過して、紅海、アラビア海からセイロン島東南端の「ゴール港」に入港したのは一八七三年八月三日であった。一行は北緯六度赤道直下の熱帯の地で三日間を過ごし、美しい自然に接し、仏教遺跡、僧侶や原住民の生活、庭園、植民地時代の城塞の町を観察した。

「南ヨーロッパ、アフリカの赤茶けた野や禿山の様相とはまるで異なる深い山の緑、青い海洋、生い茂る植物群、肥沃な土地、澄んだ空気、美しい海岸景色がある。欧州からやって来てこの風景を見ると、本当に人間にとっての極楽界と感じてしまう。」と久米が南国の風土を絶賛しているのが印象的である。一行はゴール港の豪商・ムードリア氏を訪ね、その歓談を通じて、この島国について多くの情報を得ることができた。

使節団が西欧各国を訪問後、国家の要人と面会することなく、この熱帯の島国に立寄り、真に考えたことは何だったか。『実記』第五編の「解説・岩倉使節団とアジア」に、「使節団のヨーロッパ文明信仰と東南アジア観」として田中彰氏は重要な示唆を与えている。岩波書店・同時代ライブラリーの「岩倉使節団・米欧回覧実記」には、その論考が集約されている。

今回の発表に際して、この国について多くに新たな情報を得て学び、四百五十年に及ぶ西欧の植民地政策、多民族・多宗教・多言語、風習の違いによる反目と対立の歴史から、「アジアへの視点」を改めて考える機会となった。

（文責）橋本 吉信



セイロン島で一行が泊まったホテル
（「写真・絵図で甦る 堂々たる日本人」）

■第百四十二回

七月八日開催、出席者十一名、第九十一巻　欧羅巴洲気候及ヒ農業総論。

冒頭は気候総論から始まる。これは農業にとって気候が重要であるという訳であろうが、温度中心に気候を支配する要因を列挙している（その点、和辻著「風土」は夏の乾燥、冬の降雨に着目しヨーロッパを「牧場」として捉えたのは卓見である）。

農業を説くにあたって、経済活動には「化形」（自然力利用による形質変化）、「変形」（自然産品の加工）、「変位」（産品の貿易）に三種があり、化形（即ち農業そのもの）こそが経済の基盤であると説く。次に各國の農産物のヘクタール当たり収量が千～三千リットルに達することを記述する（この数字はいずれも当時の日本の米に比べ高い収量である）。農作物として、穀物、貿易品、醸造品、紡績品、染料、植物油、牧草、養蚕、果樹、花木、樹木など広範な利用を例示し、日本のように穀物（とくに水田稲作）に偏らないことが重要であることを説き、農業の目的は「最モ利多キモノヲ耕スニアリ」とした。農作物以外にも林業、畜産業、漁業も細かく記述し、その総括として「耕作、樹藝、牧畜ノ三業ハ、相俟テ利益ヲ全クスルモノ」と説く。

最後に、ヨーロッパで農業が発展した理由は、経営基盤として国ごとの「勧農会社」（農業生産組合、日本の農協と異質）が発展し、また技術基盤として、研究・教育・普及が重要な役割を担っていることにあると強調する。

回覧実記における農業のポイントは、①産業の基盤としての農業→商品作物重視、②土地利用問題→水田稲作偏重批判、③貴族地主制の功罪→勧農会社に注目、④研究・普及・技術で土地生産力増強、この四点である。

レジュメ「西洋農学の導入をめぐって」により、日本への西洋農業農学導入の背景と実態を次のトピックによって解説を試みた。

○岩倉使節団などの見聞と日本の農業政策
○駒場農学校と札幌農学校
○西洋農学の実践家・津田仙
○伝統農法と老農崇拝
○明治農学体制の確立に向けて―「布衣の農相」前田正名

（文責）小林 富士雄

英訳実記を読む会報告

連絡　岩崎洋三
Tel &Fax 03-3488-0532
iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp

■第八十三回

六月三十日開催、出席者七名。第六十章ベルリン市の記下。付ポツダム

使節団のベルリン市滞在期間は三月二十一日で始まる一週間で、五日間で市内のモアビット監獄、高校、大学、消防署、市庁舎、漁業展覧会、鉄工所を、六日目には日帰りでポツダムを訪れ新宮殿、オレンジ宮、無憂宮、中国茶館、ポツダム城、マルモール宮等を見学し、二十八日ロシアに向かった。滞在中ウイルヘルム一世皇帝誕生日祝賀宴に賓客として招待され、大久保利通副使は本国からの要請で急遽単身帰国することとなった。

初日の見学先は米国フィラデルフィア、英国マンチェスター両監獄の雛形になったとも言われるモアビット監獄で、明治二十一年日本に近代監獄制度設立指導のためにこの刑務所から高級役人が派遣されている。一行は当時既に森鴎外を始めとする四百名以上の日本人留学生が医学、法学などを専攻していたフリードリヒ・ウイルヘルム大学も訪れている。

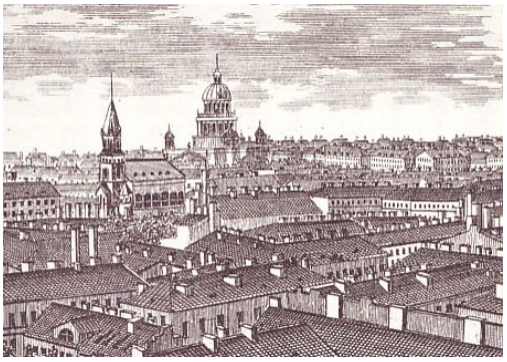
ベルリン出発後、バルチック沿岸の東プロイセン国境地帯でドイツ騎士団が嘗て所有していた原野プロイセン勃興の地を走り、ロシア国境まで七百十七キロの鉄道の旅程を終えた。ドイツ騎士団は十二世紀末に創立、神聖ローマ皇帝の勅許を得てバルト海南岸に残る異教徒を十字軍の名で征服してプロイセン公国の前身騎士団国家を築き上げた。

（文責）岡部　國雄

■第八十四回

七月十五日開催、出席者八名。Vol.4 Ch.61　A General Survey of Russia, pp.9-27

使節団はプロシャから鉄道で直接ロシアに入ったが、日本ではやっと新橋～横浜間が開通したこの時代、プロシャもロシアも既に一万キロを越える鉄道（英国の約半分）が敷設されていたことに驚かされる。一行が目指したサンクト・ペテルブルグは、ピョートル大帝が一七〇三年に建設し、一七一二年に首都移転したところで、初めて強国の仲間入りした象徴的な土地。ピョートル以前のロシアは、古くはモンゴル（タタールのくびきは一二四〇年から一四八〇年まで続いた）、トルコ、その後もスウェーデン、ドイツ、英国、ポーランド等



サンクト・ペテルブルグの光景（『実記』）

バルト海沿岸諸国の政治的・経済的な草刈場と化していたきらいがある。古い地図を見ると、フィンランド、ポーランド、バルト海三国があったりなかったりで、攻防の歴史が偲ばれる。

使節団が訪問したのは三月だったが、寒さと列車から見る景色の荒涼さに滅入ったのであろう、「ロシアは全地球の陸地の七分の一を占めるが、北緯五十～六十度の高緯度の故大半が極寒不毛の地」と決め付けている。ロシアでは、十年前に農奴制が廃止されたが、農民は土地代の二十％を地主支払い、残り八十％は政府が四十九年間、年利六％で融資を受けたとすべきところ、年利六％の国債をもらえたとも読める英訳は大変な間違い。ロシアがギリシャ正教を国教とした部分で、カトリックとの関係を禅宗と黄檗宗に見立てたり、礼拝の作法が仏教に似ていると見ているのは面白い。

（文責）岩崎　洋三

■第八十五回

九月十六日開催、出席者八名。第六十二章　ロシア鉄道とサンクト・ペテルブルグ市の総説

使節団は、ドイツ国境最終駅であるアイトクーネン駅を出発し、二日間の旅路を経てサンクト・ペテルブルグに到着する。特記すべき英訳については、久米版五十一頁「又「イザッキ」寺ハ、同寺の本堂ヲ模シタルモノニテ」の「同寺」が英訳ではカザン大聖堂となっているが、現代語訳では聖ピエトロ寺院となっている。それぞれの建物の形を検証したところ、聖ピエトロ寺院が正解と思われる。また、英訳・現代語訳共に久米がピョートルの娘であるアンナと、兄・イワン五世の次女アンナとを混同しているとの脚注が付されているが、その中に出現するピョートル二世は正しくは三世ではないかとの指摘あり。家系図とそれぞれの帝位就任時期等とを照らし合わせ、解明することが宿題となった。その他に、久米版五十一頁中央付近「又河水ニ堅氷ヲ鎖セシトキ、漁業の利アリト云」の英訳は「このようにして、河川が氷結している時期でも漁業が機能する」だが、現代語訳は「また川が氷に閉ざされたとき、川魚の漁が行われると言う」と、食い違っている。

久米版四十三頁左から六行目「此法六十五年ニ大成シ、国内ニ全ク隷農ナシ」の英訳は「「皇帝の詔勅が交付されてから」六十五年後には、債務が完済し、ロシアから農奴が一人もいなくなるであろう」であるが、現代語訳は「この方法が六五年に完成し、今、国内に農奴はいない」となっており、ここでも齟齬が見られる。

（文責）古俣　美樹

グローバルジャパン研究会報

連絡　石垣 禎信

pms-tokyo@m4.dion.ne.jp

服部英二氏の講演に関してのフリーディスカッション

七月十二日、出席二十五名、六月三日の講演会（五頁に報告掲載）を受け、グローバルジャパン研究会のメンバーで内容の理解を深めなければと企画したこの会であるが、何と服部先生ご自身も参加いただけることになり、内容のある充実した研究会となった。

先生より追加の解説をいただき、そのあと参加者によるフリーディスカッションとなったが、解釈や分析にと留まらず各自の専門分野からみた「理性と感性の融合はどうすれば実現できるのか」というような意見が続出、大変活発なディスカッションが行われた。研究会としてはこの姿勢を追及し、大望でもある日本からの発信に繋げていきたいと思う。

（文責）石垣　禎信

関西支部報告

連絡　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第五十一回

七月二十四日、出席十名。第二編（二巻）英吉利国の部 第二十三巻（章）倫敦府ノ記六十九頁から。

英国は一行に丁重に且つ淡々と海軍力を見せつけることになる。生粋の武人である山田顕義理事官は、帰国後に「兵は凶器なり」を著して民兵組織による防衛的兵制を主張した、この時巨大な英国海軍の外征的軍事力を見て、どのように思ったのか。第二十四巻（章）は、英国の議会制度、立憲政治について述べ、日本では支配者階級でない農民が（土地）財産意識がないことが（西欧と比べて）社会が脆弱になった原因であると久米は強調している。

猛暑の例会の息抜きとして「年代の逆算シュミレーション」を行ってみた。太平洋戦争勃発から六十九年が経過したが、その一九四一年から六十九年遡ると使節団がロンドンに滞在している一八七二年となる。使節団の時代が意外に最近のことであったと身近に思える。

（文責）難波　康熙

特定非営利活動法人

「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101　FAX:043-238-6690

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ　等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2010年10月～12月の予定です

☆10月全体例会

日　時：10月24日（日）　13:30～17:00
第一部：会務報告　13:30～14:30
第二部：講演会　14:45～17:00
『大国中国とどう向き合うか』
―40年のビジネス経験を通じて―
講　師：遠藤滋氏（ハチソンワンボワジャパン代表取締役ＣＥＯ）
場　所：国際文化会館　会費 2,000円/学生1,000円

☆実記を読む会

日　時：10月14日（木）　18:00～20:30
11月11日（木）　18:00～20:30
12月 9日（木）　18:00～20:30
場　所：国際文化会館　会費 1,000円

☆英訳実記を読む会

日　時：10月21日（水）　18:30～21:00
11月18日（木）　18:30～21:00
12月16日（木）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館　会費 1,000円

☆歴史部会

日　時：10月15日（金）　18:00～21:00
テーマ：「渋沢栄一の青年時代―欧州旅行とその前後」（講師：泉三郎氏）
11月15日（月）「渋沢栄一の壮年時代―実業家・渋沢の業績と生き方」（講師：小野博正氏）
12月 6日（月）「岩崎家四代の生きざま―彌太郎、彌之助、久彌、小彌太」（講師：成田誠一氏）
場　所：国際文化会館　会費 1,000円

☆グローバルジャパン研究会

日　時：11月21日（日）　13:30～17:00
講演会：「２１世紀に生かす文明としての江戸システム」
講　師：鬼頭宏氏（上智大学経済学部教授）
場　所：国際文化会館　会費 2,000円/学生1,000円

☆関西支部

日　時：10月16日（土）　13:00～16:30
テーマ：第52回例会　場所：大阪弥生会館

編集後記

◇平成七年十月二十六日発行のＪＩＫＫＩＳＡＬＯＮは、ＮＥＷＳ、米欧回覧ＮＥＷＳ、そして、会員によるデジタル編集の米欧回覧ニュースと表記を変えながら、今号で第六十号を迎えました。第一号から前号までのすべてがホームページの「会員のページ」に掲載されていますので、これを機にぜひご覧いただき、創刊（当会創立）当時の熱気を感じとってください。

◇ニュースは季刊で年四回ですが、実記を読む会は百四十三回とイチローの年間安打数を思わせる積み重ねを継続しています。一方、副理事長・事務局長として当会の運営実務の中軸を長年務められ、世代交代というには躊躇する元気さで活躍されていた山田哲司氏が既報の通り退かれました。当会の安打製造は裏方の山田氏の貢献があってこそと改めて感じます。

◇目黒駅近くの久米美術館では、「岩倉使節団・開化への旅―『米欧回覧実記』挿絵銅版画と資料展」が十一月十七日まで開催されています。記録的な猛暑の夏もようやく過ぎ、爽やかな秋の知的な散歩コースに如何でしょうか。（Ｎ）